

秦・漢における郷の治安維持機能

水間 大輔

はじめに

秦・漢では地方行政機関である県の下に郷・亭が設けられていた。^①亭は一定の距離ごとに設置され、治安の維持を主な職務とする機関である。亭が具体的にいかなる治安維持機能を有していたのかについては前稿で検討した（前稿^②）。すなわち、亭は「亭部」と呼ばれる管轄区域の警邏、亭における警戒、犯人の追捕などを職務としていた。また、県廷から遠く離れたところに設けられた亭では、亭長が告訴・告発・自首の受理を司っていた。さらに、後漢になると、遠隔地の亭は犯罪の捜査から裁判に至るまでの各刑事手続をも職務とするようになった。

一方、郷は従来の研究によると、地方行政機関の一つであ

り、徭役の徴発、徴税、民の教化の他、犯罪の取締りや裁判をも職務としていたと理解されてきた。つまり、治安の維持をも職務としている点では、亭と同じことになる。それでは、郷による治安維持機能は具体的にいかなるものであったのであろうか。そして、それは亭といかなる関係にあったのであろうか。本稿ではこれらの問題について検討し、秦・漢の治安維持制度の一端を明らかにしたい。

第一節 郷の人員

郷による治安維持機能を検討する前に、そもそも郷にはいかなる人員が配置されていたのであろうか。この問題については既に先行研究があるので、本節では私見も交えながら、それらの先行研究を整理しておきたい。

郷有秩・郷嗇夫 『漢書』 卷一九上百官公卿表上に、

郷有三老・有秩・嗇夫・游徼。(中略) 嗇夫職聽訟、収賦税。

とあり、また『続漢書』百官志五に、

郷置有秩・三老・游徼。本注曰、有秩、郡所署。秩百石。掌一郷人。其郷小者、県置嗇夫一人。皆主知民善惡、為役先後。知民貧富、為賦多少、平其產品。

とあるのによると、漢代の郷には「有秩」が置かれていた。

郷に置かれる有秩は特に「郷有秩」とも呼ばれ、県に置かれる「官有秩」とは区別されていた。³ 後者の史料によると、郷有秩は郡によつて配置され、秩一〇〇石で、一つの郷を管轄するものとされている。ただし、小さな郷では県が一人の「嗇夫」を置くとも記されているので、郷有秩が置かれるのは比較的規模の大きな郷に限られ、その他の小さな郷には嗇夫が置かれていたことになる。郷に置かれる嗇夫は郷有秩と同様、「郷嗇夫」とも呼ばれ、県に置かれる「官嗇夫」とは区別されていた。⁴ もっとも、郷有秩と郷嗇夫の間に本質的な違いがあるわけではない。確かに、郷有秩は郡、郷嗇夫は県が置くという違いもあるが、いずれも県の属吏であることに変わりはない。⁵ また、そもそも「有秩」は「有秩嗇夫」の略称であり、嗇夫の一種であつた。すなわち、嗇夫には秩一〇〇石の有秩嗇夫と、「斗食」(秩一〇〇石よりも少ない)の俸禄を受領する「斗食嗇夫」の二種類があつた。⁶ 郷有秩は有秩嗇

夫、郷嗇夫は斗食嗇夫にあたる。⁷ 両者は秩禄の多寡によつて区別されているのであつて、職務の内容が異なるわけではない。

つまり、一つの郷には郷有秩ないし郷嗇夫が一人ずつ置かれていたことになる。それは尹湾漢簡からもおおむね確認される。すなわち、前漢末期の東海郡内の各種統計を記した「集簿」には、⁸

郷百七十。(YM六D一正)

とあり、東海郡内には全部で一七〇の郷が置かれていたとされている。一方、「東海郡吏員簿」には東海郡及びそれに属する県・邑・侯国・塩官・鉄官の属吏の定員が列挙されているが、その中に見える郷有秩・郷嗇夫の定員を合計すると、前者は二五人、後者は一三七人であり、合計で一六二人となる。したがつて、ほぼ一つの郷に一人の郷有秩ないし郷嗇夫が置かれていたことが確認される。

郷の規模は戸数が基準とされていたようである。すなわち、『続漢書』百官志五の劉昭注が引く『漢官』に、

郷戸五千則置有秩。

とあるのによれば、五千戸以上の郷に郷有秩が置かれ、逆に五千戸未満の郷には郷嗇夫が置かれていたことになる。

ただし、以上のように郷有秩と郷嗇夫を区別して配置するようになったのは、漢代でも時代が下つてからのことであつて、前漢初期ではこれと異なる制度が行われていたようであ

る。すなわち、張家山漢簡「二年律令」の「秩律」には、

①司空・田・郷部二百石。（第四五〇簡）

②田・郷部二百石。（第四六四簡）

③郷部百六十石。（第四六六簡）

④田・郷部二百石。（第四六八簡）

⑤母乘車者、及倉・庫・少内・校長・擘長・発弩・衛（衛）

將軍・衛（衛）尉士吏、都市・亭・厨有秩者、及母乘車

之郷部、秩各百廿石^⑩。（第四七一簡・四七二簡）

とあり、官秩二〇〇石・一六〇石・一二〇石の「郷部」が見える。ここでいう郷部とは「郷部耆夫」の略称であり、後の郷有秩・郷耆夫に相当する。郷有秩の官秩は一〇〇石、郷耆夫は斗食であるから、郷部耆夫の官秩は郷有秩をも上回っていることになる。しかし、紙屋正和氏は、漢初における有秩の官秩は一〇〇石ではなく、二五〇石^⑪・一〇〇石であったとされる。この解釈に従えば、漢初における二〇〇石・一六〇石・一二〇石の郷部耆夫は、耆夫の中でも有秩耆夫であったことになる。

ここで問題となるのは、郷部耆夫の官秩は二〇〇石・一六〇石・一二〇石に限られたのかという点である。一二〇石未満、さらには斗食の郷部耆夫は置かれていなかったのであろうか。秩律にはそもそも一二〇石以上の吏しか記されていないので、秩律に見えないからといって、漢初に一二〇石未満の郷部耆夫が置かれていなかったと断定することはできない。

しかし、秩律では校長でさえ一二〇石とされている（前稿②）。校長は後に亭長と改称され、前漢中期に官秩が佐史へと引き下げられた（前稿②）。それに対して、郷耆夫の官秩は佐史よりも高い斗食であった。それゆえ、いわば郷有秩・郷耆夫の前身である漢初の郷部耆夫も、校長より官秩が低かったとは考えがたい。また、⑤の「都市・亭・厨有秩者」とは「都市耆夫・都亭耆夫・都厨耆夫のうち、有秩耆夫である者は」という意味と解される（前稿②）。すると、これらの耆夫の中には有秩耆夫でない者、つまり斗食耆夫もいたことになるが、この中に郷部耆夫は列挙されていない。それゆえ、やはり郷部耆夫は全て有秩耆夫であり、二〇〇石・一六〇石・一二〇石の三等級に限られたと考えられる。

それでは、郷部耆夫の官秩は何に依じて三等級に区分されているのであろうか。①の前には「胡」以下、数十もの県名と中央官署の名称が列挙されており、最後に、

秩各八百石、有丞・尉者半之。司空・田・郷部二百石。

とあるように、以上の長官の官秩は全て八〇〇石であり、郷部耆夫は二〇〇石と記されている。つまり、県令・長が八〇〇石の場合、その県に所属する郷部耆夫は二〇〇石ということになる。以上と同様に、②では県令・長が六〇〇石、郷部耆夫が二〇〇石、③では県令・長が五〇〇石及び三〇〇石、郷部耆夫が一六〇石となっている。④は簡首から「田・郷部二百石」と記されているが、前にいかなる簡が配列されてい

たのか不明であり、いかなる条件が設定されていたのかは定かでない。また⑤では、乗車を持つていない郷部嗇夫は一二〇石とされている。要するに、県令・長が八〇〇石あるいは六〇〇石であれば、郷部嗇夫は二〇〇石、県令・長が五〇〇石あるいは三〇〇石であれば、郷部嗇夫は一六〇石、乗車を持つていない郷部嗇夫は一二〇石ということになる。つまり、その郷が置かれている県の令・長の官秩、及び乗車の有無に応じて官秩が区分されていたといえる。後の郷有秩と郷嗇夫のように、戸口の多寡に応じて区分されているわけではなかった。

次に、いつから有秩の郷有秩と斗食の郷嗇夫に区分されるようになったのであろうか。紙屋氏は前漢・武帝の太初元年（前一〇四年）に二五〇石―一〇〇石の県の属吏が一〇〇石以下へ引き下げられたと推測されている¹²。おそらく、このときに郷部嗇夫の官秩も引き下げられ、有秩の郷有秩と斗食の郷嗇夫になったのであろう。

『漢書』百官公卿表上では前掲の記述の下文に「皆秦制也」とあり、郷に郷有秩・郷嗇夫を置く制度はもともと秦の制度であったとされている。にもかかわらず、秦でも郷有秩・郷嗇夫が置かれていたか否かをめぐっては、睡虎地秦簡の出土以降、論争が展開されてきた¹³。睡虎地秦簡には「郷有秩」・「郷嗇夫」という語が直接見えないからである。しかし、高村武幸氏も指摘される通り、近年出土した里耶秦簡には「都

郷嗇夫」・「啓陵郷【嗇】夫」が見えるので、遅くとも統一後の秦では郷嗇夫が置かれていたことが明らかになった¹⁴。氏はさらに睡虎地秦簡・里耶秦簡に見える「郷主」が郷嗇夫を指すと解されている。また、秦でも郷嗇夫が置かれていたとする説は、睡虎地秦簡の「郷」の中には「郷嗇夫」の省略と見られるものがあることを根拠の一つとしていたが、里耶秦簡にも同じような「郷」の用例が見える¹⁵。よって、秦の郷嗇夫は統一前から置かれていたと見るべきであろう。なお、二年律令は漢律の中でも秦律を継承して間もない頃のものであるから、秦の郷嗇夫もおそらく斗食嗇夫ではなく、全て有秩嗇夫であったと推測される。

前掲の『漢書』百官公卿表上及び『統漢書』百官志五によると、郷有秩・郷嗇夫の職務は徭役の徵発・徵税・「聴訟」であった。これらのうち、本稿の課題にとって重要なのは「聴訟」である。この問題については第三節で詳しく検討することとしたい。

游徼 『漢書』百官公卿表上では前掲に続いて、
游徼徼循禁賊盜。

とあり、また前掲『統漢書』百官志五の下文には、

游徼掌徼循、禁司姦盜。

とあり、郷には「游徼」が置かれていたとされている。特に、『後漢書』卷一八臧宮列伝の李賢注が引く『統漢書』に、
每郷有游徼、掌徼禁姦盜也。

とあり、また『晉書』卷一四地理志上に秦制を受け継いだ漢代の制度として、

郷有三老・有秩嗇夫・游徼各一人。

とあるように、游徼は郷に一人ずつ置かれていたとまで記されている史料もある。しかし、尹湾漢簡「東海郡吏員簿」に記されている東海郡内各県の游徼の人数を合計すると、八二人にしかならない。尹湾漢簡集簿によると、東海郡には一七〇の郷があつたはずであるから、一つの郷に一人の游徼が必ず配置されていたわけではなかつたようである。

游徼は巡回して犯罪を取締ることを職務とする。これはまさに亭長と同じ職務といえるが、この問題については後述する。

游徼も他の郷吏と同様、『漢書』百官公卿表上では秦制とされている。しかし、秦で游徼が置かれていたことは、他の史料には見えない。睡虎地秦簡には郷に関する史料も含まれているにもかかわらず、游徼は見えない。また、里耶秦簡も現在までに公表されたものに限定すれば、やはり游徼の存在を確認することはできない。さらに、漢初の史料である二年律令や「奏瀝書」にも游徼を見出すことはできない。游徼が現れる史料上最も古い例は、『漢書』卷八九循吏伝黃霸条に、

始霸少為陽夏游徼。
とあり、黃霸が若いときに淮陽郡陽夏県の游徼となつたとあるのがそれである。同条に、

霸少学律令、喜為吏。武帝末以待詔入錢賞官、補侍郎謁者。

とあり、黃霸の若いときは前漢の武帝末期にあたるので、遅くとも武帝末期までには游徼が置かれていたことになる。¹⁶⁾

郷佐『統漢書』百官志五には、前掲の游徼に関する記述に続いて、

又有郷佐。属郷、主民収賦税。

とあり、「郷佐」が郷に属していたと記されている。臧知非氏は、郷佐は郷に置かれていたわけではなく、普段は県廷に勤務し、県の命令があれば郷へ赴いて職務に従事したと解されている。¹⁷⁾しかし、郷佐が郷に属していたとする『統漢書』百官志五の記述を無視することはできないであろう。それゆえ、やはり従来からいわれてきた通り、郷佐は郷に置かれていたと考えられる。

尹湾漢簡「東海郡吏員簿」に記されている東海郡内各県の郷佐の人数を合計すると、八八人にしかならない。東海郡には一七〇の郷があつたはずであるから、郷佐も游徼と同様、一郷に一人ずつ置かれていたわけではなかつたことがわかる。郷佐が全く置かれていない郷もあつたのであろう。

『統漢書』百官志五によると、郷佐の職務は賦税の徴収である。しかし、安作璋氏、熊鉄基氏は伝世文献及び出土文字資料を史料として、郷佐は賦税の徴収のみならず、その他の行政・民事・兵事も総管し、その地位は郡県という丞に相当

するものであったと解されている。¹⁸⁾ また、池田雄一氏は『急就篇』第三〇章に、

齋夫・仮佐扶致牢。

とある「仮佐」を郷佐と解し、郷佐も司法に関与していたとされる。¹⁹⁾ ただし氏は、郷吏は極めて少人数であったので、郷吏が相互協力して郷の運営にあたっていた可能性を示されている。郷佐はその名称からすると、郷の長官である郷有秩・郷齋夫を補佐することを職務とするごとくである。それゆえ、郷佐が郷有秩・郷齋夫による司法を補佐していた可能性も否定できない。ただし、右の『急就篇』以外に郷佐が司法に関与していたことを窺わせる史料は見えない。

ところで、郷佐は『統漢書』百官志に見えるものの、『漢書』百官公卿表には見えない。しかし、里耶秦簡には、²⁰⁾

卅年三月己未、平邑郷涇下佐昌与平邑故郷守士五（伍）

虽・中・哀・佐涇・童禺□□不備十三真錢百九十五、負童分錢□卅八。（J一¹⁶二）

とあり、鄒水僕氏はこの中に見える「佐涇」の「佐」を郷佐と解されている。²¹⁾ 冒頭の「卅年」は秦始皇三〇年（前二二七年）を指す。これは現在までに公表されている史料のうち、郷佐が見える最古の史料である。²²⁾ それゆえ、郷佐は遅くとも統一秦から置かれていたことが知られる。ただし、睡虎地秦簡では例えば秦律十八種「效律」に、

倉齋夫及佐・史、其有免去者、新倉齋夫・新佐・史主廩

者、必以廩籍度之。（第二三九簡）

とあり、倉齋夫など各種齋夫の下に「佐」が置かれている例が散見する。睡虎地秦簡には統一後の史料が含まれていないとされているので、統一前の秦でも郷齋夫の下に佐が置かれていた可能性は高い。

郷卒 岳麓書院藏秦簡「數書」には、²³⁾

凡三郷、其一郷卒千人、一郷七百人、一郷五百人。今上
婦千人、欲以人数衰之。問幾可（何）。婦幾可（何）。曰、
千者婦一……。（第九四三簡）

とあり、郷に置かれた卒の人数に関する計算が算数の例題として挙げられている。すなわち、全部で三つの郷があり、一郷には一〇〇〇人、一郷には七〇〇人、一郷には五〇〇人の卒がそれぞれ置かれているが、三郷全体で一〇〇〇人の卒を上級機関へ返還する場合、各郷はそれぞれ何人返還すればよいか、という例題である。これによると、郷には数百人〜千人程度の卒が置かれていたことになる。「上婦千人」すなわち上級機関へ一〇〇〇人の卒を返還する、という表現からすると、おそらく郷卒は県から郷へ派遣されるものと考えられる。彼らがいかなる職務を担っていたのかは定かでないが、亭に置かれた卒も警邏や犯人の追捕などの治安維持活動に従事していたので（前稿①）、郷卒もおそらく単なる軍事力にとどまらず、治安維持活動にも従事していたと推測される。亭には亭長の他、四人程度の亭卒が置かれているに過ぎず、単

独では反乱や群盗などの大規模な犯罪に対処することが想定されていたと考えられるが(前稿^③)、少なくとも秦の郷は亭と異なり、ある程度の規模の犯罪にも対処することが可能であったことになる。ただし、漢代でもこれほど多くの郷卒が置かれていたのかどうかは未詳である。

以上の他、郷には「三老」・「孝」・「悌」・「力田」も置かれていた。彼らはいずれも吏ではなかったが、郷の教化を司っていた。彼らの職務は本稿で扱う郷の治安維持機能と直接関係があるわけではないので、言及しない。

第二節 郷吏・郷卒をめぐる指揮系統

次に、以上の郷吏・郷卒が相互にいかなる関係にあったのか、また郷以外の行政機関といかなる関係にあったのかを検討したい。

まず、郷吏はいずれも郷に置かれていたものの、郷に所属する吏ではなく、郡県から派遣された県の属吏であった(郷有秩は郡から派遣された県の属吏。第一節参照^⑤)。中でも游徼については、隋・蕭吉『五行大義』卷五論諸官が引く前漢の翼奉の言に、

游徼・亭長外部吏、皆属功曹。

とあり、県の功曹に所属するものとされている。功曹は県内

の政務を統轄し、県令の政務を補佐することを職務とする。^⑥他の郷吏も県の属吏であるから、おそらく功曹によって統轄されていたと推測される。

ただし、郷吏は同じく県の属吏とはいえず、郷の内部である程度統属関係があったものと思われる。すなわち、従来から指摘されてきた通り、郷有秩・郷嗇夫は郷の長官であった。そして、郷佐はその職務の範囲が定かでないものの、何らかの形で郷有秩・郷嗇夫を補佐していたと考えられる。それゆえ、おそらく郷佐は郷有秩・郷嗇夫の指揮を受けて職務に従事していたのであろう。

一方、游徼については『急就篇』第二章の顔師古注に、秦漢之制、十里一亭。亭有高樓、所以候望。郷嗇夫治之。

游徼即嗇夫之所統也。

とあり、郷嗇夫によって統率されるものとされている。しかし、西川利文氏は『統漢書』百官志五の劉昭注が引く後漢・応劭『漢官儀』に、

亭長課徼巡。尉・游徼・亭長皆習設備五兵。

とあることをもって、「尉——游徼——亭長の関係が想定されている」とし、游徼は郡太守——県令——郷——里の系統に属するのではなく、郡都尉——県尉——亭——郵の系統に属し、県尉と亭長を結ぶ存在として位置していたと解されている。^⑦游徼が県尉の指揮下にあったことは、以下のような史料からも裏づけられる。すなわち、懸泉漢簡には、^⑧

黄竜元年二月己酉(二〇・二四③・二〇二A面)

檄到、遣尉・游徹過紀部界。(B面)

□□守丞付福祿獄□□……(C面)

とあり、尉と游徹が何らかの行動を共にしている例が見える。また、居延旧簡には、

□殿 居延左尉義游徹左襄督燕(一三三・三九)

とあり、游徹が居延県の左尉と文書上名を連ねている。それゆえ、游徹は県尉の指揮を受けていたといえそうである。游徹は亭長と同様、巡回して犯罪を取締ることを職務とするが、亭長も県尉の指揮を受けていたので、游徹が県尉の指揮を受けていても不思議ではない。

もっとも、その一方で前掲の翼奉の言によると、游徹は功曹に所属するものとされている。亭長は県の功曹に所属しつつも、県尉の指揮を受けていたと考えられるが(前稿②)、おそらく游徹も同様であったのであろう。

以上から、郷吏の中でも游徹だけは郷有秩・郷嗇夫の指揮下になく、県尉の指揮を直接受けていたと考えられる。ただし、それでも游徹の職務はあくまでも郷を単位とするものであった。各郷には「郷部」と呼ばれる管轄区域が設けられていたが、游徹もこの郷部を単位として活動していたようである。すなわち、翼奉の言に見える通り、游徹と亭長は「外部吏」であった。外部吏とは県廷内で職務に従事する吏ではなく、県廷の外で「部」すなわち管轄区域を割り当てられて職

務に従事する吏のことであろう。ちなみに、亭長も「亭部」と呼ばれる管轄区域を持っていた。また、懸泉漢簡に、

君会広至、羌人当以時出、唯廷調左部游徹賀及間亭吏卒
(二〇・一五②・一〇)

「李孟初神祠碑」に、³⁰⁾

永興二年六月己亥朔、十日□宛令……部觀農賊捕掾李竜・南部游徹……屋有守祠義民、今聴復。

とあるように、「左部游徹」・「南部游徹」なるものが見える。「左」・「南」は郷の名称であろう。方位はしばしば郷の名称として用いられている例があるからである。「左部」・「南部」はそれぞれ左郷・南郷の郷部を指し、左部游徹・南部游徹は左部・南部を管轄とする游徹を指しているであろう。さらに、王杖十簡には、³²⁾

河平元年、汝南西陵県昌里先、年七十受王杖、類部游徹
呉賞使徒者毆擊先、用託地。(第七簡・八簡)

とあり、「類部游徹」が見えるが、これも類郷の郷部を管轄とする游徹と考えられる。

次に、前節で指摘した通り、郷には郷卒が置かれていたのであるが、郷卒はどの郷吏の指揮下にあったのであろうか。亭長は游徹と同じく、巡回して犯罪を取締ることを職務としていたが、亭卒を率いてその職務を行っていた。それゆえ、郷では游徹が郷卒を率いていたと考えられなくもない。しかし、尹湾漢簡によると、游徹は必ずしも全ての郷に置かれて

いるわけではなかった。しかも、東海郡には一七〇の郷があるのに対し、游徼は八二人しか置かれておらず、游徼が置かれていない郷は半数近くに及ぶので、それらを例外と見なすことはできない。もし郷卒が游徼によって統率されていたのであれば、游徼が置かれていない郷では誰が郷卒を率いていたのが問題となる。したがって、やはり郷卒は郷の長官である郷有秩・郷嗇夫によって統率されていたと考えるべきであろう。ただし、游徼が置かれている郷では、游徼の職務遂行のため、游徼の下にも何人かの郷卒が配属されていたと推測される。

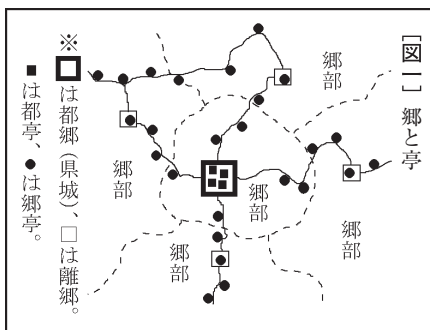
次に、郷とそれ以外の行政機関の関係をめぐっては、かつては郷が複数の亭を統轄し、さらに亭が複数の里を統轄していたとする説もあった。しかし、特に王毓銓氏の研究以来、亭は治安維持のために設けられた機関であり、郷・里のような民政のための機関とは行政系統を異にするものであって、亭は郷の管轄下に置かれていたわけではなく、また里も亭ではなく郷の管轄下に置かれていたとする説が有力となった。³³つまり、郷と亭の間には上下関係、指揮・命令の関係があるわけではなく、両者は並列の関係にあったことになる。

しかし、その一方で游徼が亭長を指揮していたとする説も根強く存在する。³⁴それは前掲『漢官儀』に「尉・游徼・亭長皆習設備五兵」とあり、県尉・游徼・亭長の順に列挙されていること、及び亭長から游徼へと転任した例があることなど

を根拠とする。しかし、尹湾漢簡によると、東海郡では約半数の郷に游徼が置かれていなかった。それゆえ、游徼が亭長を指揮していたとは考えがたい。おそらく、各地域の治安維持は亭によって担われていたが、特に治安維持の強化が必要な地域にのみ游徼が置かれ、亭による治安維持を補強していたのではないであろうか。一つの郷部には複数の亭が置かれていたと考えられるが(図一)、游徼はそれらの亭と協力して治安維持活動に従事していたと推測される。例えば、『急就篇』第二十八章には、

変闘殺傷捕伍隣、亭長・游徼共雜診。

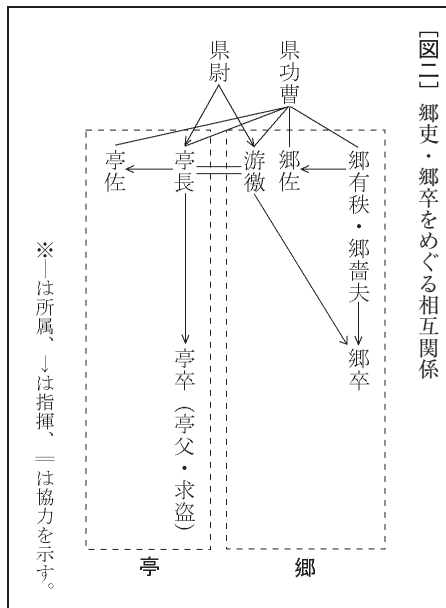
とあり、「闘殺傷」(闘「格闘」)の最中に相手を殺傷すること



が発生した場合、「伍隣」の者を捕え、亭長と游徼が共同で「診」(事件発生現場を詳しく調査すること)を行うものとされている。

以上から、郷内部における郷吏・郷卒の相互関係、及び郷吏と他官との関係は、図一のようになっていたと考えられよう。

〔図二〕 郷吏・郷卒をめぐる相互関係



第三節 郷による治安維持機能

それでは、以上のような郷の人員によって担われる郷の治安維持機能は具体的にいかなるものであったのであろうか。

警邏 第一節で挙げた『漢書』百官公卿表上及び『統漢書』百官志五によると、游徼は巡回して犯罪を取締ることを職務とする。後漢・衛宏『漢旧儀』巻下にも、

亭長課射、游徼徼循。

と記されている。つまり、游徼は今日という警邏を職務としていたことになる。

游徼が実際に警邏を行っている例は史料上確認できないが、亭長も警邏を職務とし、亭卒を率いて警邏を行っていたので、游徼も警邏の際には郷卒を率いていたと推測される。また、亭の人員は武装して警邏を行っていたが（前稿③）、『漢旧儀』巻下に、

尉・游徼・亭長皆習設備五兵。五兵、弓弩・戟・盾・刀劍・甲鎧。

とあり、游徼は五種類の武器に習熟し、それらを常備していたと記されているので、游徼も警邏の際には武装していたと考えられる。

游徼による警邏の範囲は、おそらく郷部であったであろう。郷部の中には複数の亭があるので、游徼は複数の亭部を警邏していたともいえる。つまり、游徼による警邏と、亭長による警邏は、その範囲が重複していることになる。游徼による警邏は各亭による警邏を補強する役割を果していたと推測される。

それでは、游徼が置かれていない郷では、誰が警邏を担当していたのであろうか。安作璋氏、熊鉄基氏は『急就篇』に「嗇夫・仮佐扶致牢」とあることから、小さな郷には必ずしも游徼が派遣されず、郷嗇夫・郷佐が游徼の職務を兼任していたと述べられている。³⁵ 郷部嗇夫・郷有秩・郷嗇夫・郷佐が郷卒を率いて警邏を行っていた、あるいは郷卒だけで行っていたと考えられなくもないが、史料から確認することはでき

ない。ただし、安氏、熊氏も指摘される通り、各地には亭が置かれていたので、游徼が置かれていない郷でも亭によって警邏が行われていたことは確かである。

告訴・告発・自首の受理 二年律令「具律」には、

諸欲告罪人、及有罪先自告而遠其県廷者、皆得告所在郷。

郷官謹聽、書其告、上県道官。(第一〇一簡)

とあり、罪を犯した者を告訴・告発する場合、及び罪を犯した者が犯罪の発覚前に自首する場合、「県廷」(県署・県庁)から遠く離れたところにいる者は、現在いるところの郷に対して告訴・告発・自首を行うことができると定められている。逆にいえば、告訴・告発・自首は県廷に対して行うのが原則であって、県廷から遠く離れたところに限り、郷に対して告訴・告発・自首を行うことができたことになる。つまり、遠隔地の郷は告訴・告発・自首の受理を職務の一つとしていたことが知られる。

追捕 前掲『漢書』百官公卿表上及び『続漢書』百官志五によると、游徼の職務は巡回して犯罪を取締ることとされている。しかし、『漢書』卷八三朱博伝には、

姑幕県有群輩八人報仇廷中。皆不得。(中略)博口占檄文曰、府告姑幕令・丞、言賊発不得、有書。檄到、令・丞就職。游徼王卿力有余、如律令。王卿得敕惶怖、親属失色。昼夜馳驚、十余日間捕得五人。

とあり、琅邪郡姑幕県の游徼王卿が逃走中の犯人の一部を捜

し出し、これを逮捕している。つまり、この史料によると、游徼は犯人の追捕をも職務としていたごとくである。もともと、この史料では、王卿は琅邪郡太守の朱博の命令を受けて追捕を行っているので、本来游徼は犯人の追捕を職務としていなかったにもかかわらず、太守の命令によって特別に追捕を行ったと見れなくもない。しかし、「游徼王卿力有余、如律令」について顔師古注は、

游徼職主捕盜賊。故云如律令。

と述べ、游徼は盜賊を捕えることを職務としていたからこそ、太守の朱博は游徼の王卿に犯人追捕を命令した際、「如律令」すなわち律令の通りにせよと述べたとする。それゆえ、やはり游徼は犯人の追捕をも職務としていたと考えられる。

追捕も警邏の場合と同様、游徼が置かれていない郷ではいかなる者がこれを行っていたのが問題となる。二年律令「賊律」には、

賊燔城・官府及県官積窠(聚)、棄市。賊燔寺舍・民室屋・廬舍・積窠(聚)、黥為城旦舂。其失火延燔之、罰金四両、責所燔。郷部・官嗇夫・吏主者弗得、罰金各二両。(第四簡・五簡)

とあり、放火・失火が発生した場合、郷部嗇夫・官嗇夫・吏主者は犯人を捕えなければ、罰金二両に処すると定められている。また、同「錢律」には、

盜鑄錢及佐者、棄市。同居不告、贖耐。正・典・田典・

伍人不告、罰金四兩。或頗告、皆相除³⁶。尉・尉史・

鄉部・官嗇夫・士吏・部主者弗得、罰金四兩。(第二〇一

簡・二〇二簡)

とあり、県尉・尉史・郷部嗇夫・官嗇夫・士吏・部主者は「盜鑄錢」(不法に錢を鑄造すること)の罪を犯した者を捕えなければ、罰金四兩に処すると定められている。それゆえ、ある特定の犯罪については、郷部嗇夫も犯人の追捕を行わなければならなかったようである。このような場合、おそらく郷部嗇夫・郷有秩・郷嗇夫が一人で犯人を追捕したわけではなく、郷佐や郷卒を率いて行ったことであろう。もともと、これはあくまでも特定の犯罪の場合であって、郷部嗇夫・郷有秩・郷嗇夫があらゆる犯罪について追捕を行わなければならなかったのかどうかは判然としない。しかし、少なくとも亭長は犯人の追捕をも職務の一つとしていたので、たとえ郷吏が追捕を行わなかったとしても、亭が追捕を行っていたことは確かである。

裁判 『漢書』百官公卿表上に「嗇夫職聽訟」とあるのによると、郷嗇夫は裁判をも職務としていたごとくである。傳挙有氏は東晉・虞預『会稽典錄』に、

鄭弘為靈文郷嗇夫。民有弟用兄錢者。未還之。嫂詣弘訴之。弘壳中單、為叔還錢。

とあり、民が郷嗇夫に対して訴えている例が見えること、また居延新簡「建武三年侯粟君所責寇恩事」ではある訴訟につ

いて、都郷嗇夫が全ての審理を行っていることを根拠として、確かに郷嗇夫は聽訟をも職務としていたとされる³⁶⁾。

一方、羅開玉氏は、睡虎地秦簡封診式の各案例では直接県廷に対して告訴・告発・自首がなされているので、「嗇夫職聽訟」は秦の制度について述べたものではなく、秦では郷が裁判を行う権限を持っていなかったと述べられている³⁷⁾。また、宮宅潔氏は封診式や「侯粟君所責寇恩事」を根拠として、郷が犯人を逮捕した後、その取調べを行ったり、あるいは県が主宰する裁判において、郷が県の指示によって関係者の取調べを行うこともあったが、判決を下し、刑を執行できる最末端の単位はあくまでも県であったとされる³⁸⁾。

このように、先行研究では郷が裁判を職務としていたか否かをめぐって見解がわかれているが、それは時代によって異なるとする説もある。まず臧知非氏は、封診式では郷が県の命令によって犯人の家産を差押えたり、ある隸臣妾の身分についての詳細や犯罪の証拠を調査している例が見えるので、秦の郷は法の執行に協力するのみであり、独自に裁判を行うことはなかったと解されている³⁹⁾。しかし、その一方で二年律令具律及び「侯粟君所責寇恩事」を根拠として、漢初以降は郷も独自に裁判を行うことを職務とするようになったとされる。すなわち、氏は二年律令具律に「皆得告所在郷。郷官謹聽、書其告、上県道官」とあるのについて、これは郷が訴訟人に代わって訴状を県へ送り、県が審理を行うことを述べた

ものではなく、郷が直接受理して審理の全過程を執り行い、その結果を県へ報告すべきことを述べたものと解されている。さらに、「侯粟君所責寇恩事」の訴訟手続については、①寇恩が債務を返済しないとして、甲渠候官の粟君が寇恩を居延県の「都郷」（県廷が置かれている郷）に訴えた↓②居延県の都郷耆夫が一審の判決を下した↓③原告はこれを不服として、張掖郡太守府に上訴した↓④張掖郡太守府は居延県に再審理を命じ、居延県はさらに都郷耆夫に再審理を命じた↓⑤都郷耆夫は原判決を維持し、居延県もその判決を支持し、結審した、ととらえられている。

また、張信通氏は二年律令具律に、

県道官守丞毋得断獄及讞（讞）。相国・御史及二千石官所置守段（仮）吏、若丞缺、令一尉為守丞、皆得断獄・讞（讞）⁴⁰。（第一〇二簡）

とあるのについて、「代理の県令・県丞には断獄・讞獄の権利と責任がないので、県令・県丞は基層の断獄・讞獄の最低官員であったはずである」と述べ、漢初の郷には独自に裁判を行う権限がなかったとして、臧氏の説を批判されている⁴⁰。そのうえで、張氏は『後漢書』卷四九王符列伝が引く後漢・王符『潜夫論』愛日篇に、

從此言之、中才以上足議曲直。郷亭部吏亦有任決断者。而類多枉曲、蓋有故焉。

とあること、及び「侯粟君所責寇恩事」を根拠として、後漢

では郷も裁判を行う権限を有するようになったと解されている。

それでは、この問題はどのように考えるべきであろうか。まず、多くの先行研究で指摘されている通り、少なくとも秦では、郷は裁判を職務とせず、県の指示を受けて犯人の家族・財産を差押えたり、犯人の身元についての照会に回答するなど、県による裁判に関する手続の一部を担当するに過ぎなかったようである。そして、張氏も指摘される通り、それは漢初でも同様であったと考えられる。それゆえ、二年律令具律の「郷官謹聽、書其告、上県道官」も、郷が告訴・告発・自首を受理した場合、郷が裁判を行い、その結果を県へ報告するという趣旨ではなく、郷は受理した告訴・告発・自首の内容を県へ書面にて報告するだけであり、裁判は県が行うという趣旨と解される。封診式には、

亡自出 郷某爰書、男子甲自詣。辞曰、士五（伍）、居某里。以迺二月不識日去亡。母它坐。今来自出。●問之
□名事定。以二月丙子將陽亡。三月中逋築宮廿日。四年三月丁未籍一亡五月十日。母它坐。莫覆問。以甲猷典乙相診。今令乙將之詣論。敢言之。（第六七五簡・六七八簡正）

とあり、逃亡の罪を犯した者がみずから郷に出頭したのに対し、郷が取調べを行い、その取調べの内容と犯人の身柄を県へ送っている。本件では犯人が「自出」している。自出とは

犯罪の発生が官憲によって既に認知された後、犯人がみずから官署へ出頭することを指す。秦律・漢律では同じく犯人が官署へ出頭することを表すものとして「自告」という語もあるが、自告は犯罪の発生が官憲によって認知される前に、官署へ出頭すること、つまり今日でいう「自首」にほぼ相当する^④。前掲の二年律令具律（第一〇一簡）によると、県廷から遠く離れたところにある郷は、この自告を受理することが認められていたが、おそらく右の自出の場合も同様に扱われたのであろう。右の「亡自出」条の場合、この具律に相当する秦律の規定か、あるいは類似の規定によって、郷が取調べを行い、その取調べの内容を県へ送ったものと推測される。

次に、張氏は後漢に入ると、郷も裁判を職務とするようになったと述べられている。氏はその根拠の一つとして、「侯粟君所責寇恩事」を挙げられている。しかし、そもそも本件の訴訟手続に対する解釈が誤っているように思われる。氏は臧氏の解釈にそのまま従われているが、初山明氏はこれと全く異なる解釈を示されている。氏によると、本件の訴訟手続は、①粟君が寇恩を居延都尉府に訴えた↓②居延都尉府は「驗問」（取調べ・訊問）を行うよう甲渠候官に指示し、甲渠候官はこれを居延県へ伝達し、居延県は都郷嗇夫に寇恩の驗問を命じた↓③都郷嗇夫が驗問の結果を居延県へ送った↓④居延県は驗問の結果が甲渠候官から送られた文書と一致していないこと、及び居延都尉府の指示により、再度驗問を行う

よう都郷嗇夫に指示した↓⑤都郷嗇夫は再び驗問を行い、その結果を居延県へ送った↓⑥居延県はこれに県の意見を付したうえで、甲渠候官へ送った↓⑦甲渠候官は以上の結果を居延都尉府へ報告した、という順番で進められている。氏はそのうえで、本件の場合、居延都尉府が最終的な判決を下したと推測されている。そして、都郷嗇夫は上級機関の命令によって、訴訟の当事者の取調べ・訊問などを行ったのみであり、判決を下したわけではないとされる。従うべきであろう。つまり、「侯粟君所責寇恩事」はいわば居延都尉府の指揮下において行われた裁判であり、郷が主導的に行った裁判ではなく、上級機関による裁判の一部を補助したに過ぎない。それゆえ、「侯粟君所責寇恩事」は後漢の郷が裁判をも職務としていた根拠とはならない。

しかし、『潜夫論』には郷が裁判を行っていたことを窺わせる史料が見える。もっとも、張氏が引用された部分だけでは、その点が必ずしも判然としない。また、氏は『後漢書』に引用されている『潜夫論』を挙げられたが、現行本の『潜夫論』ではこの部分の前後が比較的詳しく記されている。そこで以下、氏が引用された部分も含め、その前後を現行本『潜夫論』から引用する。

孔子曰、聴訟、吾猶人也。從此觀之、中材以上皆議曲直之弁・刑法之理可。郷亭部吏足以斷決、使無怨言。然所以不者、蓋有故焉。伝曰、惡直醜正、実繁有徒。夫直者

真正而不撓志、無恩於吏。怨家務主者結以貨財。故鄉亭与之為排直家。後反覆時吏坐之、故共枉之於庭。以羸民与豪吏訟、其勢不如也。是故県与部并。後有反覆、長吏坐之、故拳鼎排之於郡。

これによると、郷・亭の吏にも判決を下し、訴訟の当事者に怨み言をなくさせるのに十分な能力があるにもかかわらず、怨み言がなくならないのは、郷・亭の吏が裁判において不正を行っているからであること、しかも郷・亭の吏によって下された不正な判決に対し、県が結託することもあることなど、後漢当時の社会の現状が述べられている。

さらに、前掲の『会稽典録』でも、後漢のとき郷嗇夫を務めていた鄭弘が民からの訴えを受理し、紛争を解決している。それゆえ、後漢の郷は確かに裁判を職務としていたようである。

それでは、郷はいつから裁判をも職務とするようになったのであろうか。まず、秦・前漢の郷が裁判を行っている例は見えない。さらに、後漢になると、県廷から遠く離れたところにある亭も裁判を職務とするようになったので（前稿③）、郷による裁判もこれと同時に制度化されたと推測される。それゆえ、『漢書』百官公卿表上の「嗇夫職聴訟」も後漢の制度を反映しているのであろう。

後漢の郷も亭と同様、裁判を職務としていたのは県廷から遠く離れた郷に限られたのか、それとも県廷からの距離を問

わず、全ての郷が裁判権を持っていたのかは、史料から直接明らかにすることはできない。私は以前、後漢になると遠隔地の亭に裁判権が与えられたのは、両漢交替期に多くの県が廃止されたことに原因があると推測した（前稿③）。県の数が少なくなれば、各県が統治する領域が広くなるはずであるから、県廷から遠く離れた地域はおのずと増加することになる。遠隔地の亭で裁判が行われるようになったのは、このような遠隔地の増加に対処するためであったと推測される。このような推測が正しいとすれば、やはり郷も亭と同様、遠隔地に限って裁判を職務としていたのではあるまいか。

ところで、『潜夫論』では「郷亭部吏足以断決、使無怨言」とあり、郷による裁判は判決を下すことによって、訴訟の当事者の怨み言をなくさせることが理想とされている。また、『後漢書』卷四一第五倫列伝には、

倫後為郷嗇夫。平徭賦、理怨結、得人歡心。

とあり、第五倫は郷嗇夫に就任すると、民に課す徭役・賦税を公平にし、怨恨を裁き、人々の歡心をえたとされている。

「平徭賦、理怨結」の部分はまさに『漢書』百官公卿表上の「嗇夫職聴訟、収賦税」と対応する。「平徭賦」は「収賦税」の理想的な状態、「理怨結」は「聴訟」の理想的な状態をそれぞれ述べたものであろう。それゆえ、この第五倫列伝の記述からも、郷による裁判はやはり民衆間の怨恨を解くことが理想とされていたことがわかる。

すると、郷による裁判は犯罪に対して刑罰を科すことよりも、民衆間の紛争を解決することに重点があったのかもしれない。前掲の『会稽典録』も妻が夫の弟を相手どって、借金返済するよう郷耆夫に訴えたものであり、やはり民衆間の紛争である。そもそも「聴訟」の「訟」は『周礼』地官大司徒の鄭玄注に、

争罪曰獄、争財曰訟。

同秋官大司寇の鄭玄注に、

訟謂以財貨相告者。

とあるように、財物に対する権利をめぐる争うことであり、ある行為がいかなる罪にあたるかをめぐって争う「獄」とは区別されていた。財物をめぐる訴訟は、当然民衆間の訴訟であろう。郷による裁判が文字通り財物をめぐる訴訟のみに限定されていたのはわからないが、郷耆夫の職務として挙げられているということは、これが郷による裁判の最も主要な部分を占めていたからではないであろうか。もともと、『潜夫論』に「中材以上皆議曲直之弁・刑法之理可。郷亭部吏足以斷決、使無怨言」とあるのによると、郷による裁判においても犯罪に対して刑罰を科すことは行われていたようであるが、その目的はあくまで訴訟の当事者の怨み言をなくさせることにあった。民衆間の訴訟の中で詐欺や窃盗など、犯罪にあたる行為があれば、刑罰を科すことによって治安を向上させるとともに、被害者側の怨恨を少しでも緩和させたのであ

ろう。それゆえ郷は、あるいは県のように完全な裁判権を持っていたわけではなく、民衆間の訴訟を裁くのが中心であって、その他の重大な犯罪については秦・前漢と同様、告訴・告発・自首を受理するだけであり、裁判は県が行ったのか、あるいは県が本格的な裁判を行うための予備的な審理を行うに過ぎなかったのかもしれない。

結 語

以上で検討した通り、郷は治安維持機能に限っていえば、警邏、告訴・告発・自首の受理、犯人の追捕、裁判などの機能を有していた。しかし、これらの機能は亭も有しており、郷に特有のものではなかった。亭は郷部の中にあつたので、一つの地域の治安維持機能は、少なくとも郷・亭という二つの機関によって担われていたことになる。しかも、亭は郷によって統轄されるのではなく、郷と同じく県に直属していたので、郷の指揮・命令によって職務を行っているわけではない。つまり、両者の治安維持機能は一つの地域で重複し、相互に並行して行われており、一本化されていなかったといえよう。

しかし、それでも郷と亭の間には相異点があるので、両者の治安維持機能にはおのずと区別が生じていたと考えられる。まず第一に、亭は郷よりも数が多かった。それゆえ、亭の方

が郷よりも各地に張り巡らされていたといえる。管轄範囲もおのずと郷より狭くなるので、警邏・追捕によって不審な人物や逃走中の犯人を見つけるのは、相対的に容易であったはずである。それゆえ、警邏・追捕は、基本的には亭によって担われていたと考えられる。

しかし、亭には亭長の他、四人程度の亭卒が置かれているに過ぎなかった。後漢になると、さらに亭佐も置かれるようになるが（前稿②）、それでも亭長・亭卒と合わせても六人程度に過ぎない。それゆえ、亭の人員だけでは警邏・追捕を必ずしも十分に遂行し切れない場合もあったと推測される。そのような場合、郷がそれを補う形で警邏・追捕を行ったのではないであろうか。特に、亭だけで治安が十分に維持できない地域には、警邏・追捕を専門的に行う游徼が配置され、亭の警邏・追捕を補助していたと考えられる。

第二に、亭は一定の距離ごとに設置されていた。その中には人口がまばらな地域もあれば、逆に人口密集地もあったことであろう。現に、亭は県城の中にも置かれていた（前稿②）。一方、郷は人口密集地のみにも置かれていた。それゆえ、どちらかといえば郷の方が、多くの民衆にとって身近な存在であったと考えられる。告訴・告発も亭より郷に対してなされることの方が多かったのではないであろうか。

第三に、後漢では遠隔地の郷・亭が裁判を職務としていたのであるが、どちらかといえば郷の方が裁判を行うのに適し

ていたと考えられる。というのも、亭長は武吏であり、必ずしも法律に関する詳しい知識を持っていなかったからである（前稿③）。一方、郷部嗇夫・郷有秩・郷嗇夫は通常のいわば文官であった。また、郷には他にもさまざまな人員が置かれていた。もし彼らも何らかの形で裁判に携わっていたとすれば、郷の裁判は比較的高い豊かな人材によって担われていたことになる。

以上のような郷と亭の差異からすると、結局両者の治安維持機能は相互に補完しあう関係にあったと結論づけられよう。しかし、郷と亭を統轄する県も治安維持機能を有していた。それでは、県の治安維持機能は具体的にいかなるものであったのであろうか。そして、郷・亭のそれといかなる関係にあったのであろうか。これらの問題については今後の課題とした。い。

注

（１） 本稿では「県」といった場合、県と同級の地方行政組織である道及び邑・列侯国も含むものとする。先行研究においても「県」は如上の意味で用いられているように思われるので、本稿で引用する先行研究についても同様とする。

（２） 本稿では拙稿「秦・漢の亭卒について」（工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、二〇〇九年）を「前稿①」、同「秦・漢の亭吏及び他官との関係」『中国出土資料研究』第一三号、二〇〇九年）を「前稿②」、同「秦・漢における亭の治

安維持機能」(鈴木秀光・高谷知佳・林真貴子・屋敷二郎編『法の流通』慈学社、二〇〇九年)を「前稿③」と呼ぶこととする。

- (3) 謝桂華「尹湾漢墓簡牘和西漢地方行政制度」『文物』一九九七年第一期、西川利文「漢代における郡県の構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」(『弘教大学文学部論集』第八一号、一九九七年)参照。

- (4) 西川氏前掲論文参照。

- (5) 池田雄一『中国古代の聚落と地方行政』(汲古書院、二〇〇二年)五四二・五四三頁(一九七三年原載)参照。

- (6) ただし、斗食がいかなる数量の俸禄をえていたのかをめぐっては諸説ある。池田氏前掲書五七七・五八一頁(一九七二年原載)参照。

- (7) 裘錫圭『古代文史研究新探』(江蘇古籍出版社、一九九二年)四三八・四四五頁(一九八二年原載)参照。

- (8) 尹湾漢簡の簡番号・釈文は連雲港市博物館・東海県博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・中国文物研究所編『尹湾漢墓簡牘』(中華書局、一九九七年)によった。

- (9) 張家山漢簡の簡番号は張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編『張家山漢墓竹簡』(二四七号墓)『文物出版社、二〇〇一年』、釈文は彭浩・陳偉・王藤元男主編『二年律令与奏讞書』(上海古籍出版社、二〇〇七年)によった。

- (10) 早稲田大学簡帛研究会「張家山第二四七号漢墓竹簡訳注(一)」(『長江流域文化研究所年報』創刊号、二〇〇二年)第四簡・五簡注(六)参照。

- (11) 紙屋正和『漢時代における郡県制の展開』(朋友書店、二〇〇九年)七五・七七頁(二〇〇五年原載)参照。

- (12) 紙屋氏前掲書二一・二一九頁(二〇〇五年原載)参照。

- (13) 高敏氏、裘錫圭氏、張金光氏は秦でも郷嗇夫が置かれていたと

されるが、堀毅氏、羅開玉氏は置かれていなかったとされる。高氏『睡虎地秦簡初探』(万卷楼圖書有限公司、二〇〇〇年。一九七九年初版)一三六頁、裘氏前掲書四三四頁、四六二頁、四六八頁(一九八一年原載)、張氏『秦制研究』(上海古籍出版社、二〇〇四年)五七〇・五七五頁(一九九七年原載)、堀氏『秦漢時代の嗇夫について——『漢書』「百官表」と雲夢秦簡による一考察——』(『史滴』第二号、一九八一年)、羅氏『秦國郷、里、亭新考』(『考古与文物』一九八二年第五期)参照。

- (14) 高村武幸『漢代の地方官吏と地域社会』(汲古書院、二〇〇八年)二八三・二八五頁参照。

- (15) 劉樂賢「里耶秦簡和孔家坡漢簡中的職官省称」(『文物』二〇〇七年第九期)参照。

- (16) ちなみに、二〇〇四年・〇五年に広東省広州市老城区の南越国宮署遺址中の井戸丁二六四から出土した木牘には「返(返) 弩令緹故游衛(徹) 持将則卒廿六年七月属 五百緹(積) 引末弓□」(第八一簡)と記されている。黄展岳『先秦两汉考古论叢』(科学出版社、二〇〇八年)四四七頁参照。黄氏はこの中の「游衛」を

「游徹」と推測されている。氏によると、本簡に見える「廿六年」は南越の武王二十六年、つまり前漢の文帝二年(前一七八年)を指す可能性が高いとのことである。それゆえ、もし本簡の游衛が游徹を指すとなると、少なくとも南越では、漢でいうところの文帝期には早くも游徹が置かれていたことになる。また、南越は秦の官吏であった趙佗が建国し、しかも漢とは別に成立した国家であるから、南越の制度は漢と必ずしも関係がなく、秦から受け継いだものである可能性が高い。すると游徹は、遅くとも統一秦末期には置かれていた可能性も否定できない。しかし、「衛」が「徹」の通假字として用いられている例は見えないので、この游衛が游徹を指すかどうかは、まだ検討の余地があるように思われる。

(17) 臧知非「簡牘所見漢代鄉部的建制与職能」(《史学月刊》二〇〇六年第五期) 参照。

(18) 安作璋・熊鉄基『秦漢官制史稿』(齊魯書社、二〇〇七年再版。一九八四年初版) 六九二・六九三頁参照。

(19) 池田氏前掲書五五六・五五七頁(一九七三年原載) 参照。

(20) 里耶秦簡の簡番号・釈文は湖南省文物考古研究所編著『里耶発掘報告』(岳麓書社、二〇〇六年) によった。

(21) 鄒水傑「簡牘所見秦漢屬吏設置及演變」(『中国史研究』二〇〇七年第三期) 参照。

(22) 睡虎地秦簡の秦律十八種「田律」に「百姓居田舍者、毋敢酺(酺) 酉(酒)。田嗇夫・部佐謹禁御之」(第七九簡)、「法律答問」に「部佐匿者(諸) 民田、者(諸) 民弗智(知)。当論不当。部佐為匿田、且可(何) 為。已租者(諸) 民、弗言、為匿田。未租、不論〇〇為匿田」(第五二七簡)とあり、「部佐」という語が見え、睡虎地秦墓竹簡整理小組はこれらの部佐を郷佐と解している。しかし、裘氏は、部佐は郷佐ではなく、「田嗇夫」が郷に設けた「田佐」であり、各郷の農地などに関することを司っていたとされる。裘氏前掲書四五七・四五九頁(一九八一年原載) 参照。従うべきであろう。

睡虎地秦簡の簡番号は雲夢睡虎地秦墓編寫組編『雲夢睡虎地秦墓』(文物出版社、一九八一年)、釈文は同書及び睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』(文物出版社、一九九〇年) によった。

(23) 岳麓書院藏秦簡の簡番号・釈文は陳松長「岳麓書院所藏秦簡綜述」(《文物》二〇〇九年第三期) によった。

(24) もっとも、「東漢三老趙掾碑」には「時長蘭芳、以寬宿德、謁請端首、優号三老、師而不臣。於是乃聽訟理怨、教誨後生百有余人、皆成俊艾」とあり、後漢の趙寬が三老に就任し、「聽訟理怨」を行っ

たと記されている。ただし、ここでいう三老が郷三老を指すのか、

それとも県三老を指すのかは判然としない。傅氏は郷三老、高文氏は県三老と解されている。傅氏「有関秦漢鄉亭制度的幾箇問題」(『中国史研究』一九八五年第三期)、高氏「漢碑集釈」(河南大学出版社、一九九七年修訂本。一九八五年初版) 四四一頁注「五〇二」参照。しかし、たとえこの三老が郷三老であるとしても、ここでいう「聽訟理怨」は正式な裁判ではなく、訴訟の当事者を和解させ、怨恨を解消させたということであろう。第三節で述べる通り、後漢の郷では郷有秩・郷嗇夫が正式に裁判を職務としていたからである。また、訴訟の当事者を和解させることは、郷三老本来の職務ではなかったと考えられる。というのも、初山明氏が指摘される通り、特に後漢では、軽微な係争に関しては正式な裁判ではなく、有識者に決裁を求めることで決着を図る例が見えるからである。同氏「中国古代訴訟制度の研究」(京都大学学術出版会、二〇〇六年) 一五九頁(一九九五年原載) 参照。それゆえ、趙寬が行った決裁も三老としての職務ではなく、有識者として決裁を求められたのであろう。以上と同じことは、『後漢紀』卷二二孝桓皇帝紀上建和元年条に「民有詞訟、先命三老・孝・悌諭解之。不解、祐身至閭里自和之」とあるのについてもいえる。

ちなみに、「東漢三老趙掾碑」は一九四三年に青海省樂都県白崖子で発見されたものである。釈文は沈年潤「釈東漢三老趙掾碑」(《文物》一九六四年第五期) によった。

(25) 日比野丈夫『中国歴史地理研究』(同朋舎、一九七七年) 一五八・一五九頁(一九五五年原載)、嚴耕望『中国地方行政制度史 甲部 秦漢地方行政制度』(中央研究院歷史語言研究所、一九八八年第三版。一九六一年初版) 二二七・二二八頁、二三七・二三八頁、越智重明「漢魏晉南朝の郷・亭・里」(『東洋学報』第五三卷第一号、一九七〇年)、安・熊氏前掲書六九三・六九四頁など参照。

- (26) 嚴氏前掲書一一九、一二三頁、一二三四頁参照。
- (27) 西川氏前掲論文参照。
- (28) 懸泉漢簡の簡番号・釈文は胡平生・張德芳『敦煌懸泉漢簡簡牘』(上海古籍出版社、二〇〇一年)によった。
- (29) 居延旧簡の簡番号・釈文は謝桂華・李均明・朱国炤『居延漢簡積文合校』(文物出版社、一九八七年)によった。
- (30) 「李孟初神祠碑」の釈文は高文氏前掲書一七五・一七六頁によった。ちなみに、この碑は清の乾隆年間、白河水が溢れたときに出土したものである。
- (31) 日比野氏前掲書一五六頁(一九五五年原載) 参照。
- (32) 王杖十簡の簡番号・釈文は中国科学院考古研究所・甘肅省博物館編『武威漢簡』(文物出版社、一九六四年)によった。
- (33) 先行研究については前稿②注(36) 参照。
- (34) 小畑竜雄「漢代の村落組織に就いて」(『東亜人文学報』第一卷第四号、一九四二年)、西川氏前掲論文、張信通「秦漢時期的郷亭」(『安順学院学報』二〇〇八年第二期) など参照。
- (35) 安・熊氏前掲書六九〇頁参照。
- (36) 傅氏前掲論文参照。なお、『会稽典録』は佚書であり、傅氏はこの記述を『北堂書鈔』卷七八から引用されている。しかし、『北堂書鈔』の通行本である清・孔広陶の校本はもちろんのこと、明・陳禹謨の校本も調べたが、この記述を確認することはできなかった。ちなみに、この記述は『太平御覧』卷四〇三、卷四九一、卷六九一にも引用されている。卷によって内容が異なっているが、本文で挙げたのは同書卷四〇三のものである。
- (37) 羅氏前掲論文参照。
- (38) 宮宅潔「秦漢時代の裁判制度——張家山漢簡『奏讞書』より見た——」(『史林』第八一卷第二号、一九九八年) 参照。
- (39) 臧氏前掲論文参照。
- (40) 張氏前掲論文参照。
- (41) 自出と自告の違いについては、初山明「秦の裁判制度の復元」(林巳奈夫編『戦国時代出土文物の研究』京都大学人文科学研究所、一九八五年) 参照。
- (42) 初山氏前掲書一三九、一四九頁(一九九五年原載) 参照。
- 〔付記〕 本稿は中国教育部哲学社会科学重点研究课题攻关項目「秦簡牘的綜合整理与研究」(〇八JZD〇〇三六)の研究成果の一部である。
- (武漢大学簡帛研究中心博士後)